

暖冬の鴨猟

文 木村安兵衛

Text by Yasube Kimura

パンのある幸せな食卓を

あ

まりにも弾が動物に当たらず過ぎて、「猟友会」から「動物愛護協会」に鞍替えすることになりました。その心の傷が冷めやらぬ次の週末、今度は福島へ鴨獲りに参戦することとなりました。私は何を撃つても的に当たる自信を喪失している状態での遠征です。今回は成果を求めるよりも誤射や暴発などの事故が起きないように注意することを優先するのでした。昨年はあまりにも銃器による事故、事件が多過ぎましたから尚更です。

夜中の東北道をひた走り、明け方を会津磐梯山ふもとのコンビニで迎えました。1日分の食料、おやつ、飲み物を買ひ込みます。冬の会津の河川にズブズブと入って行けるように胴長を着込み、全身を迷彩で包み込みます。鴨は眼が良いのでオレンジ色のベストを着ると逃げられてしまいます。

通年だと雪に覆われ始める会津の地に雪の気配がありません。暖冬のせいなのでしょう。それは鴨にも伝わり、彼らの姿が見当たりません。普段だと鴨の群れが付いている川のトロ場や溜池を回りますが、なかなか鴨には遭遇できません。こんな時でも動物愛護オーラが鴨に警告を発信してしまっている

のではないかと疑心暗鬼になってしまいます。

すると歩き方も雑になってくるのであります。川辺に近づく足音に反応して、川を覗く直前に鴨が飛び出してしまいました。反射的に銃を構え引き金を引きます。ドーン！

ちゃんと構えても当たらないのに、反射的に撃って当たるわけがない。と思っていたら、なぜか鴨は対岸に落ちるのでした。

「おかしい！」ではなくて「やった！」久しぶりに血流がドクドク波打ってくる感覚に酔いしれるのでした。その刹那、足元の草藪から鳥の影が飛び出してきました。キジのオスです。キジは種の保護の為に捕獲はオスのみとされており、メスの捕獲は禁止されており、長い尾羽を確認すると引き金を絞ります。ドーンという音とともにキジは対岸まで吹っ飛んで行き、落ちてくれました。

1つの猟場で2羽。しかもキジを落とせた事は人生初めてだったので、心臓はドンドン音を立て、眼球がクルクル回っていることを感じたほどです。全員の「打ち方やめ」の合図とともに鴨とキジの回収に走りますが、どちら

も見当たりません。半矢といって絶命せずにまだ生きていたのでしよう。あちらも生きるためには死に物狂いで逃げ回るので。しかも全身保護色になっているので見つかりにくいのです。鴨は撃つよりも回収が難しい。久しぶりに実感したのであります。

昨年の三分の一も獲れない鴨猟の成果を見ながら暖冬、黒潮の蛇行や自然環境の変化を目の当たりにした気分になるのである。

自然環境の改善に思いを馳せながら、鴨猟をするのでした。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA（米国食品医薬品局）研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2021年3月末時点31店舗を数える。

